がたいと思っております。このような予定で進めますのでひとつどうぞご協力をお願いいたします。

では早速1番目の方からお願いいたします。谷藤助先生であります。ではご登壇いただけますか。先生はハルピン学院のご出身であり、そして愛知大学昭和25年のご卒業であります。その年司法試験に合格されまして検事に任官され、公安調査庁総務部長にご就任になりまして、そのあと最高検察庁検事、山形地検検事正等を歴任されておられます。ということで、ひとつよろしくお願いいたします。

【谷】 ご紹介にあずかりました谷です。私は愛知大学予科の第1期生でした。愛知大学が創設された年に予科3年生の編入試験を受けて合格して、その後法経学部しかございませんでしたが1年生になりまして、そこを昭和25年に卒業し、予科は1期生、学部は3期生というちょっと変な形なんですが、そういう形で卒業いたしました。愛知大学に入る前には、当時満州国と言っておったんですけども、中国の東北地方、いわゆる東北三省のハルピン市にあったハルピン学院という、最後は満州国立大学ハルピン学院という正式名称なんですけども、通称ハルピン学院というようにわれわれは呼んでおります、そこを卒業して愛知大学に入った。まあ簡単にはそういう経歴でございます。

ハルピン学院からは愛知大学ができた当時に、私を含めて5名の者が編入試験を受けて入っておりまして、言わば先ほどからご説明のありました愛知大学のルーツ校のささやかな1つの学校ではないかと思いますが、そのハルピン学院という学校について簡単にお話をして、なぜハルピン学院へ入ったかというような話を、時間内にできればさせていただきたいと思います。配布されております講演資料の一番初めに「ハルピン学院について」という講演メモがございますが、よろしければそれをご覧いただきたいと思います。

ハルピン学院という学校はそこにも書いてございますように、1920（大正9）年の創立でして、昭和20年の8月に、終戦と共に廃校になる。学院の期間は25年。わずか四半世紀に過ぎない寿命でございました。そこが時代のいろいろな移り変わりに従いまして、最初はここにございますように日露協会学校という名前で、その後満州国ができてからハルピン学院という名前になり、そして終わりの頃には満州国に学校が移管されて、満州国立大学ハルピン学院と、こういうような形で推移したわけです。最初の入学生、つまり大正時代の入学生というのは、学生の定員が1学年50名ぐらいで、ほとんど全部が府県費生、つまり日本の各県が募集して、学費を出して、その県で1名ないし2名が選抜されて行くという形式でございましたから、全部が言わば学費は県持ちで、一銭も要らずに行けた。日本の大学と違って学費が要らないというので、相当むずかしい競争率だったようでございます。

このハルピン学院というのは、卒業したら主に今のロシア、つまりソ連邦とのあいだの貿易とか通商とか、そういう仕事に従事する学生を養成する学校でして、日本で言う外国語大学のロシア語科と同じような学校でしたので、当時の日本とソ連とのいわゆる交易というのは、ソビエトの革命によってほとんど途絶されたというような状態になっていたので就職口がなく、相当な秀才の連中がわざわざ志をもってハルピンへ行ったわけなんですけども、卒業しても勤めるところがないというような状態で非常に苦労をしたし、学校当局としても困って、50名の定員が30名に減らされ、それが当分続いたという細々とした、言わば塾的なような学校でした。それが昭和6年に満州事変が起こり7年に満州国が成立して、いわゆる満州国内での学生の需要もできたために、ハルピン学院という名前に変わって、そして最後には満州国の国立大学になったために、やや就職口が持ち直して30名が60名になり、私達が入った昭和18年には100名募集されるというような形で、活

況を呈する大学になったわけです。

こういうような形でハルピン学院が成立し、そして最後を迎えることになるわけなんですけども、25年という学校の歴史で、卒業生は1,412名という、ほんとにわずかな卒業生で、今の新しい大学から言えば1年生の1学年の募集にも満たないような、言わば塾的な学校ですから、あまり現在では知られていない大学と言えるのではないかと思います。学校の授業はちょっと申し上げましたようにロシア語が主でして、言わばもうロシア語漬けと言いますか、午前中は100名募集された学生を20名の少数のクラスに分けて、専任のロシア人の会話の講師が1名と、それからロシア語の文法の先生が1名付いて、1週間毎日、月曜から土曜日までロシア語です。ロシア人の講師には日本語を知らない人もおるし、知っておっても日本語は絶対しゃべらないという形ですから、入学した当時からロシア語でペラペラやられて、さっぱり何を言ってるのか分からないうちに授業が済んでしまうというような経験をしたことがあります。文法もアルファベットを教えてくれるわけじゃなし、いきなりもうロシア文法をどんどんやらされるというような形で、何か分からぬあいだに1学期が過ぎると、まあだいたい優秀な学生はロシア語がほとんど不自由しないぐらい分かってくるし、分からない連中もハルピンという町はロシア人の多い町でして、ロシア人のレストランだとか、質屋だとか、そういうところに行けばロシア語には不自由しないから、だいたいできない連中も1学期でロシア語が分かるようになる、というような教育を受けさせられたわけです。そして3年生からはだいたい授業がロシア語になって、ロシアの憲法だとか経済だとか地理だとか、そういうものをロシア語で教えられるという、言わばロシア語漬けの学校でした。一般の教科は午後の時間に当てられて、これは日本の法学部や経済学部とだいたい似たような経済、法学、国文学だとか、その他に外地の学校ですから大東亜資源論だとか、こんなような学科を教えられる他に、戦時中でしたので軍事教練が非常に盛んに行なわれた。こういうような形で私達はだいたい2年から3年に進む。3年に進んだ時には、実はこの年は徴兵年齢、つまり兵隊に取られる年齢が今まで20歳だったのが19歳に1年短縮されるということで、3年生の学生のほとんどは昭和20年の5月頃までには全員戦争で召集されて兵隊に行かされる。それ以外にも、どうせ兵隊に行かされるならばというので、軍人の言わば幹部候補生のような試験がいっぱい陸軍にも海軍にもありましたので、最初からそちらのほうへさっさと行ってしまう、というような形で、昭和20年の5月頃になると、もう学校の体をなさなくなってきたわけなんです。

教職員も召集され、学生も召集され、満州の国立大学になってから日本人以外に約1割の中国人、蒙古人、朝鮮人の学生もおりましたけれども、それらの連中しか学校には残らなくなってしまって終戦を迎える。それまで日本の内地からハルピンに来たら、こんな天国みたいなところがあったのかと。日本はもう配給制度で、ろくに食料も充分ないような、言わば「国民精神総動員」という形で「贅沢は敵だ」というように言われておったのが、ハルピンは物資は何でもあるし、自由に遊べてロシアのオペラのような音楽会を見たり、非常に自由な雰囲気で、こんないいところへ来て良かったなと思ったんですけれども、20年8月の終戦になったら途端に天国から地獄に落ちてしまって、学生のほとんどは兵隊に行かされる、そして特にハルピン学院の学生はほとんどがソ連に抑留されるというような、地獄の憂き目を見るようになったわけです。われわれの卒業生は先ほど申しました1,400人のうち、238人がソ連に抑留という数字になっております。もちろん内地に勤めていた人もおりますし、満州以外で勤めていた人もおりますから、もっと確率的には多いんですけども、言わば全部の卒業生の5名に1名はシベ

リアに抑留される。そして中でも私達昭和18年に入学した者は、だいたい3～4名に1名がソ連に捕虜として抑留されるという運命で、長い連中は11年間の抑留生活を送ってやっと帰されると、そういうような形になりました。

私もやはり同じように昭和20年5月に召集をされて、そのメモにも書いてございますように、瑷琿というソ連の国境のところに行かされ、そこで要塞の中でソ連軍と戦って終戦も知らずに過ごしたわけですが、その後捕虜になってからいきなりソ連軍の中へ連行されて、日本で言ういわゆる国際裁判の予審の通訳をずっとさせられて、満州の各地を点々として、最終的には黒河からハルピンまで、東海道五十三次と同じ距離なんですが、500kmを歩きに歩いて、3か月かかってやっとハルピンに到着し、それから日本へ引き揚げてきた。引き揚げた時には栄養失調と黄疸になって、命からがらという状態で帰ってきた。それが21年の9月でしたが、さあどうしようかということで、たまたま家でブラブラしておったら、愛知大学の募集の広告を見て、学力的には全然何もできないのに、引き揚げ者優先だという記事を見て、何とかなるだろうということで、愛知大学の予科に編入をさせてもらったという形で、その後先ほどご紹介がありましたように、昭和25年、学部は経済なんですけれども、何のことかたまたま司法試験に受かって、検事の道を歩んできた。愛知大学で言わば助けられて、今の状態になるまで年をとることができたと。こういうような形になろうかと思います。

時間になりました。一応20分間という与えられた時間ですが、このようなお話で終わらせていただきたいと思います。ありがとうございます。

【司会】 大変短い時間でほんとに心苦しい限りですけれど、ただいまのお話について事実関係その他ご質問等ございますでしょうか。はいどうぞ。

【平田】 市会議員の平田と申します。全額県費ないし府費ということで、言わば官費であったために、非常に競争が激しかったということは私共想像しておりますが、同時に国内にもたとえば陸軍士官学校とか海軍兵学校のような全額生活費まで見てくれる学校があり、海外を志望してそういうところへ行かれたと思います。今お伺いした中で一番最後の、愛知大学は引き揚げ者優先と書いてあったとのことですが、私共が聞いてる範囲では東亜同文書院大学は本間先生が学籍簿を命懸けで持ってこられたので学籍が証明されたということです。ハルピン学院の場合、学力は別として、学生であったことの証明と言うか、どういう形でハルピン学院の卒業とか在籍を認定されたのでしょうか。

【谷】 それはですね、私達引き揚げてきた当初は、卒業証明書は外務省が出してくれてたんです。外務省にはハルピン学院の卒業生が勤めておりまして、その方がどうも専任の係で卒業証明書を出してくれていました。卒業証明書の申請書類はハルピン学院におられた先生の証明を必要としておったんです。ハルピン学院の卒業生ですからその先生の証明であれば間違いないだろうという、その程度のことでも戦後のどさくさですから、卒業証明書を出してくれた。それを愛知大学に出せば、愛知大学のほうで受け付けてくれた。そういうような状態だと思います。

【平田】 どうもありがとうございます。ついでにと言っては申し訳ないですが、愛知大学には胡麻本先生がおられましたが、谷先生の場合は胡麻本先生の証明ということになりましょうか。そうではないでしょうか。

【谷】 そうではございません。私は24期ですけども胡麻本先生はハルピン学院の2期の卒業生です。まあこんないきさつを言っていいのかどうか分かりませんが、当時胡麻本先生は郷里の松山のほうから拓殖大学の講師として勤めておられて、東京へ月に何回か出られるという非常に不便な生活をされておったのを聞きつけて、胡麻本先生に

「愛知大学に来ませんか」という声をかけて、胡麻本先生が「行ってもいいよ」ということで、小岩井先生に紹介して、そして胡麻本先生に来ていただいたといういきさつなんです。

【平田】 ありがとうございました。

【司会】 では次の方、はいどうぞ。

【渡辺】 一番初めにロシア語を担当された岡部幸一先生だと思ったんですが、ハルピン学院ご出身の方かと思います。先生も生徒も揃ったということでございますが、私もロシア語の授業を聞きに行きましたが、初歩の文法をやっとる時にいきなりハルピン学院の学生さんが大挙入ってみえて、毎日ロシア語でピーチクパーチクやりだして、全然分からなくなってしまいました。偶然と言えば偶然ですが、その岡部先生はご消息はいかがになっておりますか。

【谷】 先ほど言いましたように私は24期で、岡部先生は20期の卒業生なんです。そして確か豊橋の、網を作る網太という会社の役員でした。最初入学の時私はロシア語で授業をと言ったんですけど、先生がいないということでしたが、入学したら岡部先生をどなたかが連れてこられて、講師として教えられた。こういういきさつです。

（注・岡部幸一氏は平成15年9月9日逝去）

講演メモ　　ハルピン学院について　　谷　藤　助

1　沿革

創立　　１９２０年（大正９年）　９月２４日　　日露協会学校

校名の変更　１９３３年（昭和８年　大同２年）　　哈爾濱学院

１９３９年（昭和１４年　康徳６年）　　国立大学哈爾濱学院

2　学校制度

入学定員　　１学年　５０名から１００名

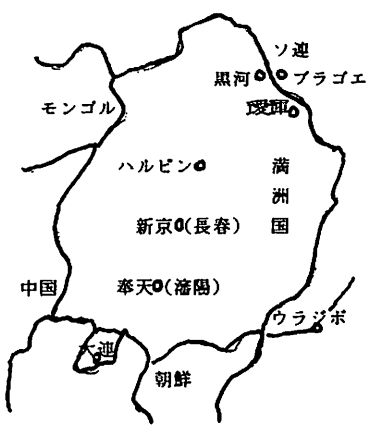
授業科目　　ロシア語中心　　法律　経済　ソ連事情

学生生活　　国際都市として映画　演劇など自由

3　終戦時と現況

ソ連抑留者　卒業者１４１２名中２３８名

哈爾濱学院記念碑　　毎年４月　東京　高尾霊園にて慰霊祭　開催



１９３９年（昭和１４年）

日本　　６８万平方粁　　９千８百万人

満州　１３０万平方粁　　３千５百万人

１９１７年（大正６年）　ロシア革命　帝政崩壊

１９３２年（昭和７年）　満洲国建国

１９４５年（昭和２０年）満洲国崩壊

【司会】 はい、ありがとうございました。ではちょうど時間がまいりましたので、またあとで1時間ほど質疑がございますので、何かございましたらそちらのほうでお願いします。どうもありがとうございます。では引き続きまして、お2人目の方は、小崎昌業先生であります。小崎先生はもう皆さんの中にもご承知の方も多いかと思いますけれど、東亜同文書院大学の42期生。そして昭和23年、旧制の愛知大学の法経学部の経済学科を卒業されまして、その後やはり外交官試験に通られて外務省、ルーマニアやモンゴルの大使をされました。なお現在、われわれの愛知大学東亜同文書院大学記念センターの運営委員をやっていただいてるお1人でもあります。ではよろしくお願いします。

【小崎】 小崎でございます。20分という短い時間なので、要領よくお話ししたいと思いますが、まず東亜同文書院というのはどういう学校であったかということを簡単に申し上げますと、1898（明治31）年に、近衛篤麿公を会長として結成された東亜同文会というのがございまして、この東亜同文会が東亜同文書院を創立したんですが、その先駆となったのは1890（明治23）年に荒尾精先生が根津一先生と共に上海に創立した日清貿易研究所でございます。1893（明治26）年6月に、日清貿易研究所の第1回卒業生89名を送り出したんですけれども、日清戦争が起こったためにこの学校は閉鎖されます。

東亜同文会は支那を保全する、支那・朝鮮の改善を助成するということを綱領にして成立し、1900（明治33）年、中国側の公認のもとに南京同文書院を創立しました。しかし義和団事件が起こったため上海に移転しまして、翌年東亜同文書院を設立してこれに合流します。

東亜同文書院は専門学校として卒業生の総数は3,219名。政治科が116名。商務科が2,995名。農工科が1科と2科と合計して60名。それから中華学生部が途中からできまして、これも満州事変で閉鎖されましたけれども、48名。修業年限は3年制でしたが、21期生から4年制になります。大学としては1939（昭和14）年から1期生が始まり、予科が2年制、学部が3年制でありまして、入学者の総数は641名、卒業者数は433名。1943（昭和18）年から3年制の専門部が始まりまして、入学者数が418名。大学の40期生から46期生までの総数は1,492名でありましたが、1945（昭和20）年8月の敗戦によって大学は閉鎖されます。

私は大学になってから、1941（昭和16）年に同文書院に入学しました。同文書院42期生です。1900年から1945年まで学校で学んだ者の数は約5,000名に達しております。

中国保全の綱領に則って日中提携の人材養成の基礎を固めることが、書院建学の壮大な精神でありました。同文書院の校舎は、兵火により炎上すること2回、6度の移転はいずれも上海の租界外でありました。そのうち徐家匯虹橋路校舎（1917～1937）時代が書院最盛期であり、大学開設は海格路臨時校舎（旧交通大学・1938～1945）でありました。学生は全国各府県から給費生が選抜され、部分的に私費生が選抜されました。私は滋賀県なんですが、たまたま受けた年に滋賀県は給費生はなかったので、その夏帰りまして県のほうに文句を言いに行った。翌年から2人、そのさらに翌年3人と出してくれましたが、私は私費生で通さなきゃ仕方ないということでした。この給費生は、国庫および公費の補助を受けましたが返済の義務はない。就職先も自由であります。

最高学年になると中国各地を調査旅行します。これを「大旅行」と言いましたけれども、中国全土から東南アジアと700コースありました。その成果を卒業論文として提出したものが『支那経済全書』、『支那省別全誌』という、十何巻もの厚い本になりました。これは東亜同文会が出版したのです。